養生所/(長崎)医学校等遺跡の
保存・保護・整備・公開に関する陳情書 IX

(旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)

添付資料

2018年(平成30年)9月7日 金曜日

長崎市議会議長
五輪 清隆 様

陳情人

〒852-8127
長崎県長崎市大手二丁目十七-四十六-一〇二

養生所を考える会 代表 池知和恭

連絡先 電　　話 [redacted]
携帯電話 [redacted]

添付資料

目　録

1.『アジアから見た新しい世界史 「帝国」支配の変遷に着目 西欧中心史観から距離』
2018年(平成30年)8月11日 土曜日 日本経済新聞 朝刊 文化38 [文化]

2.『養生所/(長崎)医学校等遺跡の範囲』
2018年(平成30年) 2月27日 月曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭

3.『養生所/(長崎)医学校等遺跡に係わる歴史年表』
〔医学伝習、大村町の医学伝習所、養生所、精得館、長崎府医学校等、梅毒病院等、佐古尋常高等小学校等、長崎市立佐古小学校等〕
初版：2017年(平成29年) 5月27日 土曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭

以上

文化

アジアから見た新しい世界史

「帝国」支配の変遷に着目

西欧中心史観から距離

日本の歴史家がアジア史、日本史の研究成果にのっとって、次々と新たな世界史の叙述に挑戦している。従来の叙述の柱だった西欧中心の歴史観から意識的に距離を取ることで、グローバル化が進む現代世界がたどってきた道のりに、違った角度から光を当てる。

「（ギリシャ、ローマなど）いわゆる地中海文明とは、オリエント（文明）の一部たるシリアの拡大、つまりオリエントの一部としてとらえるのが正当である」

中国史が専門の岡本隆司・京都府立大教授は、7月に出版した「世界史序説」（ちくま新書）の冒頭でこう述べる。古代ギリシャを「オリエントと対等に対立、対抗した存在」と位置づけて自らの文明の祖としてきた西欧の伝統的な捉え方とは180度異なる理解だ。

文明の始まり

岡本氏によると「世界史」は移動生活を営む遊牧民と定住農耕民がひんぱんに接触する地域で始まった。最古の文明はメソポタミア、イランなどを含むオリエントの地に起こり、アケメネス朝ペルシャ（前550～前330年）で頂点に達したとみる。後にペルシャを征服したアレクサンドロス大王の帝国も「古代ギリシャ世界を東方に広げたのではない。オリエントの西端の勢力が中央に進出してきたと考えた方がいい」という。

発想の源になったのは、西欧の最新理論ではなく、宮崎市定の「アジア史」、梅棹忠夫の「生態史観」など1940～50年代に日本で提唱された古典的な学説だ。「15世紀に欧州が海外進出を始めるまでの世界史は、もっとアジアや日本の史実に基づいた叙述を開拓すべきだ」（岡本氏）という考えが基にある。

比較歴史学の専門家である羽田正・東京大教授によると、「世界史」は西欧近代の歴史観の影響を強く受けて成立した学問だ。日本人が日本語で書いた世界史でも多くは「西欧を世界の中心とみなす考え方が忍び込んでいた」（羽田氏）。

しかし、人、物、資本、情報のグローバルな移動が加速した90年代以降「世界史を西欧中心史観ではなく、国境を越えた『地球の住民』の歴史として体系的に捉え直す動きが始まった」（同）。今日の日本の世界史研究もその流れの中にある。

統治形態が変化

羽田氏は3月に出版した「グローバル化と世界史」（東京大学出版会）の中で「新しい世界史のための四枚の見取り図」を示した。1700年、1800年、1900年、1960年という4つの時点で、それぞれ世界地図上にある「帝国」の統治形態の変遷に注目する。

例えば1700年の見取り図にある清、ロシア、オスマンなどの帝国は、いずれも広大な支配領域の中で様々な民族集団が共存していた特徴がある。ところが18～19世紀に英仏など西欧の王国や日本で、自国民と他国民をはっきりと区別する主権国民国家の原型が生まれ、勢力を伸ばす。1900年には旧来の帝国が衰退し、国民国家が植民地を獲得して形成した「新しい帝国」が優勢になった様子がわかる。

「帝国」をキーワードにした研究は、日本史と世界史を橋渡しする試みでも成果を挙げている。

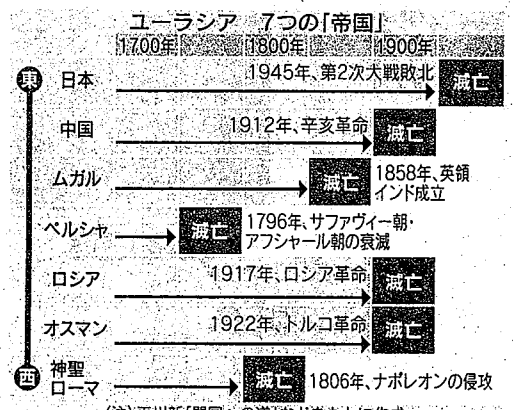
平川新・宮城学院女子大学長は4月に出版した「戦国日本と大航海時代」（中公新書）で、16～17世紀の豊臣秀吉、徳川家康、伊達政宗らがスペインなど西欧諸国と交わした外交文書を分析。天下統一の過程で、日本は西欧から「帝国」とみなされるようになったと論じた。太閤秀吉や大御所家康は西欧人の書簡で「皇帝」、諸大名は「王」とされた。例えば政宗は「奥州王」と記されている。

「当時のヨーロッパ人は日本を『中国の亜流』という意識では見ていなかった。従来の日本史や東洋史の議論に西洋の視点を導入することで、世界史の中の新たな日本の歴史像も生まれてくる」と平川氏は強調する。

こうした新しい世界史は、かつての西欧中心史観を単純に裏返したアジア中心、日本中心史観を目指しているわけではない。日本には第2次世界大戦中、京都学派の哲学者らが盛んに論じた「世界史の哲学」が、結果として聖戦遂行や大東亜共栄圏の思想を下支えした苦い経験もある。

他者の抑圧や支配の正当化ではなく、対話のための論理を鍛えるところに、アジアや日本発の世界史を構想する現代的な意義がある。「唯一の決定版世界史などというものは存在しない。西欧だけでなく、日本、中国など様々な研究のバックグラウンドを持った世界史があってよい。大事なのは、それらを互いに突き合わせて議論すること」と岡本氏は述べる。

（郷原信之）



（注）平川新「開国への道」などをもとに作成

養生所/(長崎)医学校等遺跡の範囲

改訂2版:2018年(平成30年)5月13日日曜日

2018年(平成30年) 2月27日 月曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭

私達は、当該遺跡の範囲について、下記(1)“佐古の丘の地形”(2)“中核区域”(3)“運用区域”(4)“関連区域”より構成されると考えます。

(1) 養生所/(長崎)医学校等遺跡が位置する“佐古の丘の地形”

[現在の西小島1丁目、西小島2丁目、稲田町、館内町、籠町、船大工町、寄合町、道路/通路を含む一帯]

・ポンペ・ファン・メールデルフォールト氏は、養生所の建設にあたってその建設場所について「新鮮な空気が通る、清潔な水の豊富な小高い丘の上で、街の外であるが病人の運搬に便利な場所」と献策しました。

・私達は、ポンペ氏の長崎での病院建設への献策は、当時の世界に於ける又は長崎に於ける諸状況の下に近代病院運営の体系/仕組(system)として提言されたと理解します。

・当該遺跡の立地は、ポンペ氏が示した献策に一致する態様を具えています。

・私達は、当該遺跡の立地である“佐古の丘の地形”を、当該近代病院の運営の体系/仕組(system)を具体化する実体として、当該遺跡の要素であり、当該遺跡の範囲と考えます。

・“佐古の丘の地形”は、大規模な開発事業による大規模な破壊がなく、当時の状況を良く遺存しています。

(2) 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“中核区域”

[現在の西小島1丁目の旧長崎市立佐古小学校の敷地及び外周道路(市道西小島稲田町1号線、市道西小島2号線、市道西小島館内町1号線、市道稲田町6号線、旧病院敷地の東道路及び南道路)及びその南部の西小島2丁目の一角及び可能性として長崎市道稲田町6号線の北部でその西に隣接する稲田町の一部]

〔長崎市西小島佐古16番、15番、14番、14番-2、17番-2、17番-4、18番-2、1106番、その外周道路(17番-3、18番-3を含む)、59番-2、59番-3、59番-4、可能性として長崎市稲田町44番の一帯〕

・江戸期の養生所(病院、医学所)、精得館(医学所、病院、分析究理所)、明治期に入り長崎府医学校(及び病院)を経て第五高等中学校医学部とその分教場(第五高等学校医学部、長崎医学専門学校の時代を含む)、明治期の梅毒病院から昭和期の小島病院へと推移した建物敷地及び当該敷地に接する又は内包する当該施設に由来する道路。

・一帯の西部にヘールツの居宅である蓋然性が高い平屋建洋館を含み、一帯の東部の二階建洋館も医学校関係者の居宅である可能性があります。

・この状況は、遺跡の地上遺構、文献資料、複数の医学校の図面、複数の精得館から第五高等中学校医学部とその分教場、梅毒病院から小島病院の写真より理解できます。

・ヘールツの居宅については、Prof. Harmen Beukers が提示する De Bataafsche Leeuw, Amsterdam, 1987－Teacher among the Japanese－Letter by Dr. K. W. Gratama considering his stay in Japan 1866－1871－130p 1871－“Tuesday, May 11 及び a letter (by Escher) 23. 09. 1873 によりその蓋然性が高いと理解できます。

(3) 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“運用区域”

[現在の稲田町の北部の館内町の東に隣接する一帯]

〔長崎市稲田町39番、40番、41番、42番、43番、44番、45番、46番、47番、48番、49番〕

・菜園と果樹園と初期の体操場とその付帯施設として運用されたと推測する一帯。

・この状況は、慶応年間の複数の精得館の写真、明治四年頃の医学校の写真、明治10～11年頃の医学校の写真より理解できます。

(4) 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“関連区域”

[現在の西小島1丁目と籠町と船大工町の旧大徳寺境内(墓地、参道を含む)、梅香崎天満宮と大楠神社及び大楠一帯]

〔長崎市西小島町佐古1番、2番、3番、4番、5番、6番、7番、8番、9番、10番、籠町の一部〕

・振遠隊墳墓地、明治三年から明治四年英医ニュートンが梅毒病院を運営、エッシャーが自身の日記で一帯をスクールガーデンと言及、佐古招魂社(梅香崎墳墓地)、勅使坂、明治12年に大徳寺庫裏跡一帯に長崎病院が竣工(大正期に橋本大徳園として整備し公開)した区域。

・医学校関係者が一帯を親しむ様子は、Prof. Harmen Beukers が提示する Diary of Escher 及び a letter (by Escher) 23. 09. 1873 により理解できます。

・古写真の大徳寺跡一帯の木陰に時期によりいくつかの洋館である可能性がある映像を確認できます。これが洋館であれば医学校関係者の居宅である可能性があります。

養生所/(長崎)医学校等遺跡に係わる歴史年表

改訂3版

〔医学伝習、大村町の医学伝習所、養生所、精得館、長崎府医学校等、梅毒病院等、佐古尋常高等小学校等、長崎市立佐古小学校等〕

初版：2017年(平成29年) 5月27日 土曜日　養生所を考える会 代表 池知和恭

寛永十二年六月(1635年)幕府は 大船製造禁止令 を発令
1789年7月14日 フランス バスチーユ襲撃(フランス革命)
1798年3月 バターフ共和国憲法採択
1798年5月 バターフ共和国憲法発効
1806年 ホラント王国憲法制定
1813年 オランダよりフランス軍が撤退した後、ウィレム六世はオランダに帰国し、臨時政府から「君主(プリンス)」の称号を受ける
1814年4月 フランス王政復古 ルイ18世即位
1814年6月4日 フランス王ルイ18世 憲章 制定(欽定憲法/英に倣い二院制議会制度制定)
1814年9月 ウィーン会議 開始
1814年 オランダ憲法制定
文化十二年(1815年3月16日) ネーデルラント(連合)王国成立 ウィレム一世が国王に即位(オラニエ＝ナッソウ家：兼ルクセンブルク大公：立憲君主制)
[ウィーン体制]ネーデルラント王国はフランス革命以前のネーデルラント連邦共和国及び南ネーデルラント(後のベルギー、ルクセンブルク)及びリエージュ司教領より成る
1815年 オランダ憲法改正(ベルギーの編入による)
1815年6月 ウィーン会議 終了
1830年 ベルギー独立革命
1831年2月7日 ベルギー憲法制定
天保八年四月(1837年)第十一代征夷大将軍徳川家斉が徳川家慶に将軍職を譲渡
天保八年九月二日(1837年)徳川家慶に征夷大将軍・源氏長者の宣下(第十二代征夷大将軍)
天保十年(1839年)水野忠邦が老中首座に就任
1839年 ロンドン条約　ベルギー独立
天保十一年(1840年6月)阿片戦争勃発(英清)
天保十一年(1840年10月7日) ネーデルラント(連合)王国 ウィレム一世が退位してウィレム二世が国王に即位(兼ルクセンブルク大公)
天保十二年閏一月七日(1841年2月27日)徳川家斉が薨去
天保十三年(1842年)南京条約調印(英清/阿片戦争終結)
天保十四年閏九月十一日(1843年)阿倍伊勢守正弘が老中に就任
天保十四年閏九月十三日(1843年)水野忠邦が老中を罷免される(失脚)
天保十四年(1843年12月12日) ネーデルラント(連合)王国 ウィレム一世死去
弘化元年五月(1844年)江戸城本丸焼失
弘化元年六月二十一日(1844年)水野忠邦が老中首座に再任
弘化元年七月二日(1844年8月14日)オランダのコープス大佐がパレンバン号で長崎に入港(オランダ国王ウィレム二世の阿片戦争の実情を知らせ開国を勧告する国書を第十二代征夷大将軍徳川家慶に奉呈/起草はフォン・シーボルト/幕府は翌年遅れて回答/国王の厚意を謝し開国の勧告を拒絶)
弘化元年十二月より水野忠邦は欠席
弘化二年二月(1845年)水野忠邦は老中を辞職
弘化二年九月(1845年)阿倍正弘が老中首座に就任

嘉永元年七月～八月（1848年）幕府は 海防の修築、調練、大砲の操縦等頻々と発令
嘉永元年九月（1848年）幕府は 砲術稽古の令を発令
１８４８年 ネーデルラント（連合）王国 ウィレム二世が憲法改正を認許
嘉永二年（1849年3月17日） ネーデルラント（連合）王国 ウィレム二世ティルブルフにて逝去、ウィレム三世が国王に即位（兼ルクセンブルク大公）
嘉永二年三月七日（1849年）老中阿部伊勢守が「近来蘭学医師追々相増世上にても信用いたし候もの多有之哉に相聞候右は風土も違候事に付御医師中は蘭方相用候儀御制禁被仰出候旨得御意堅く可被相守候　但し外科眼科等外治相用候分は蘭方参用致候ても不苦候」と布達
嘉永五年（1852年7月）ドンケル・クルチウスがオランダ東インド総督の命を受け来崎
嘉永五年六月五日（1852年7月21日）ドンケル・クルチウスが別段風説書を提出又は
1852年9月11日 ドンケル・クルチウスが長崎奉行に国王の命によるバタヴィア提督からの親書を届ける。親書は、アメリカ合衆国が蒸気船で訪日し日本に通商を求めるらしいという風説を伝えたうえ、戦争を避けるよう希望するもの
（開国、明治維新に向けての下地が準備形成されることになったと考えられている）
嘉永五年（1852年11月）ドンケル・クルチウスが出島のオランダ商館長に就任
嘉永六年四月（1853年6月）幕府は水野筑後守忠徳を浦賀奉行から長崎奉行とする
嘉永六年六月三日（1853年7月8日）アメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが浦賀に入港（ミシシッピ号以下四隻）
嘉永六年六月十二日（1853年7月17日）ペリーが一時退去
嘉永六年六月二十二日（1853年7月27日）第十二代征夷大将軍徳川家慶が薨去
嘉永六年七月二十一日（1853年8月25日）水野忠徳は江戸を発ち長崎に向かう
嘉永六年八月二十八日（1853年9月30日）水野筑後守忠徳が長崎奉行に着任
嘉永六年九月十五日（1853年）幕府は大船製造の禁を解く
嘉永六年十一月十二日（1853年）幕府は水戸藩に大船製造を命じる
嘉永六年十一月二十三日（1853年）徳川家定第十三代征夷大将軍に就任
嘉永七年一月十六日（1854年2月13日）ペリーが横浜沖に再来日（サスケハナ以下七隻）
嘉永七年三月三日（1854年3月31日）日米和親条約を武蔵国久良岐郡横浜村字駒形の応接所で締結
嘉永七年七月二十八日（1854年8月）オランダ東インド艦隊海軍中佐ファビウスがスーンビン号の艦長として長崎に来航、ファビウスは幕府の求めに応じ「地役人又は当地在住商工共之相撰」また黒田・鍋島両藩の家臣に三ヶ月の予備海軍伝習を実施し、長崎奉行水野筑後守忠徳の質問に答申して幕府近代西洋海軍創設を建言し、両者の応答の末に幕府閣の決裁を得た水野忠徳の案、即ち幕府近代西洋海軍創設とオランダから日本へのスーンビン号の贈呈と幕府からオランダへのコルベット艦二隻の注文と長崎海軍伝習の実施とその方針を承知
嘉永七年八月二十三日（1854年10月14日）日英和親条約を長崎で締結
嘉永七年九月（1854年11月）幕府はオランダ当局にコルベット艦二隻を発注
嘉永七年九月二十一日（1854年11月11日）ファビウスは、オランダに帰国のためジャワに向けて出帆、帰国したファビウスは、幕府提案の要件の実現に努力し、国王ウィレム三世に拝謁しこれを実現する、また、ドンケル・クルチウスへの国王特命全権領事官授与、訪日国王特使として国王侍従長ファン・リンデン伯爵の派遣が決定する

安政二年六月八日（1855年7月21日）第一次長崎海軍伝習派遣隊司令官ファビウス中佐（ヘデー号に搭乗）と訪日国王使節である国王侍従長ファン・リンデン伯爵とファン・ハルデンブルック男爵及び（第一次）長崎海軍伝習教官隊長崎港に入港（艦長ペルス・ライケン大尉（伝習教官隊長）以下伝習教官22名、スーンビン号：改名観光丸着：三本マスト・バーク型木造外車蒸気船（コルベット））
安政二年六月十一日（1855年7月24日）クルチウス一行はスーンビン号をオランダ国王ウィレム三世の名において幕府に贈呈、幕府は直ちにこれを観光丸と改称、第一次海軍伝習は観光丸を練習艦に用いる
安政二年七月二十九日（1855年9月10日）幕府は、老中達を以て、長崎在勤御目付永井岩之丞（後の玄蕃頭）尚志に「阿蘭陀献貢之蒸気船の運用其外為伝習被遣候者共之指揮掛引等都而之進退取締方引請取扱可申」と命じ、同時に、浦賀奉行、勘定奉行、船手目付、長崎奉行、大船製造掛に命じて各々その配下より伝習要員を指名し、小十人組学問所教授方出役矢田掘景蔵（鴻）、小普請組勝麟太郎（後の安房守義邦、号は海舟）、徒士目附永持亨次郎を選抜して指揮官要員とし、永井尚志の指揮下に入らし
安政二年八月十日（1855年9月20日）牧野藩士小野友五郎が航海測量伝習の参加を命ぜられ
安政二年八月二十七日（1855年10月7日）矢田堀、勝、永持、以下二十二名は「蒸気船製造並運転大砲打方」、小野等十五名は「蒸気船運送船打並航海測量御用」となって、伝習地長崎に向かう
安政二年十月九日（1855年11月）老中首座阿倍正弘は堀田正睦を老中に起用し老中首座を譲渡、長崎海軍伝習について佐賀藩（四十六人）福岡藩（二十八人）薩摩藩（十六人）熊本藩（五人）萩藩（十五人）津藩（十二人）福山藩（四人）掛川藩（一人）も伝習生を送り、十月に幕府派遣の伝習生が長崎に到着
安政二年十月二十二日（1855年12月1日）（第一次）長崎海軍伝習開所式挙行（取締永井玄蕃頭尚志（岩之丞））
安政二年十一月（1855年）永井玄蕃頭尚志はファビウスに長崎製鉄所の建設を依託
安政二年十一月十五日（1855年）ファビウスは長崎を出航しバタビアを経由してオランダ本国へ向かう
安政二年十二月二十三日（1856年1月30日）日蘭和親条約を長崎で締結
1856年初、幕府はオランダに対して引き続き第二次長崎海軍伝習派遣隊の選抜を依頼したので、オランダ本国では、新派遣隊の人選などの準備を進める、ファビウスは帰国してオランダ政府へ永井尚志の依託の製鉄所建設を日本側の要請として報告して建設への協力を具申し政府当局は製鉄所建設への協力を可決する、オランダ政府は計画の取り纏めを、オランダ国立機関廠（Rijks　Stoomvaartdienst）の海軍中佐ホイエンスへ示達し、計画され、機材類が手配される、ホイエンスは当時蒸気機関の権威と目されていた
安政三年四月二十五日（1856年）幕府は築地に講武場を開設
安政三年六月（1856年）ファビウスは軍艦メデューサ号の艦長として長崎、函館、下田へ回航
安政四年三月一日（1857年3月26日）永井玄蕃頭尚志以下幕府第一期生の卒業式を挙行
安政四年三月四日（1857年3月29日）幕府は永井玄蕃頭尚志以下幕府第一期生について長崎を出港させ（艦長矢田掘景蔵：観光丸発）これを江戸に引揚

安政四年三月二十六日（1857年4月）矢田掘景蔵等品川に到着
安政四年三月から四月（1857年）にかけて、オランダ政府は、長崎製鉄所建設の為に手配した機材類を、およそ十三隻のオランダ船で、逐次、東インドのバタビアへ集結し、バタビアの在庫を合わせて、三隻のオランダ船で日本に発送する
安政四年閏五月（1857年）幕府は築地の講武所内に軍艦教授所を開設
安政四年六月三日（1857年）製鉄所建設用機材類を積載したヤン・ダニエル号他三隻が長崎に回着し、ドンケル・クルチウスがこれを受領
安政四年六月十七日（1857年8月6日）老中阿部正弘が死去
安政四年六月（1857年）幕府は長崎奉行所に対し、西役所で蘭通詞・唐通事の他、一般有志の者にも英・仏・露語を学習させるよう訓令
安政四年七月十九日（1857年）軍艦操練教授所（軍艦教授所より改称、後、軍艦操練所と改称）稽古始
安政四年八月四日（1857年9月21日）第二次長崎海軍伝習教官隊長崎港外高鉾島近海に碇泊（艦長カッテンディーケ大尉（伝習教官隊長）以下伝習教官37名、ヤパン号：改名咸臨丸着：遡る嘉永七年九月（1854年11月）に幕府がオランダ政府に発注：三本マスト・バーク型木造内車蒸気艦（コルベット））
安政四年八月五日（1857年9月22日）第二次長崎海軍伝習教官隊出島に上陸、ほどなく幕府御目見得医師松本良順等二～三名が伝習教官オランダ二等海軍軍医ポンペを訪問
安政四年八月十二日（1857年）製鉄所建設用機材類の飽ノ浦等への陸揚を開始
安政四年八月二十九日（1857年10月16日）日蘭追加条約を長崎で締結
安政四年八月（1857年）長崎奉行所は英語学習者を募集する（語学伝習所の発足：長崎奉行所西役所内）
安政四年九月七日（1857年10月24日）日露追加条約を長崎で締結
安政四年九月十五日（1857年11月1日）第二次長崎海軍伝習教官隊第一次教官隊より引き継ぎ
安政四年九月十六日（1857年11月2日）第一次海軍伝習派遣教官隊長ペルス・ライケン中佐（日本滞在中に進級）と教師団一行は、オランダ商船アンナ・デフナ号で帰国の為長崎を出港
安政四年九月二十六日（1857年11月12日）ポンペは長崎奉行所西役所で就任披露講演をなす
安政四年九月二十七日（1857年11月13日）ポンペは長崎奉行所西役所で医学の講義を開始
安政四年十月十日（1857年11月26日）幕府はハルデスにより長崎製鉄所を起工
安政四年十一月十二日（1857年12月27日）ポンペは大村町の医学伝習所に於いて始めて公開の種痘を行う（この時までに医学伝習は大村町の高島秋帆邸内の西北隅の一屋に移転（大村町の医学伝習所））
安政四年十一月十六日（1857年12月31日）までにポンペは長崎奉行所に対して病院設立の申請をなし
安政四年中に解剖学教程の為に屍体解剖による解剖学教授を行いたい旨を建議
安政五年二月頃（1858年）ポンペは江戸出発前に長崎奉行所に建白書の写しを提出
安政五年二月末から四月にかけて（1858年）オランダ領事ドンケル・クルチウスは江戸に参府

に参府
安政五年二月二十四日(1858年4月7日)ドンケル・クルチウスは第十三代征夷大将軍徳川家定に謁見、「安政五午年、和蘭領事官参府御用留、江戸取扱書類書状ー和蘭領事官蘭書差上候儀ニ付申上候書付 永井玄蕃頭 岡部駿河守 長崎表外療蘭人筆記致し候趣ニ而別冊病院同附図并種痘之記其外蘭書玄蕃頭和蘭領事官江応接之砌差上度旨ニ而差出候ニ付即別紙目録相添差上申候依之此段申上候以上 午 三月 永井玄蕃頭 岡部駿河守 目録・・・」
安政五年四月二十三日(1858年)井伊直弼が大老に就任
安政五年五月三日(1858年6月13日)エド号が長崎港に入港(内車式蒸気木造コルベット艦:改名して朝陽丸)
安政五年(1858年)幕府が長崎に入港した英国木造横帆船(三檣バーク)カタリナ・テレジア号を購入(改名して鵬翔丸)
安政五年五月十一日(1858年6月21日)幕府第二期生第一期生残留組鵬翔丸を江戸の軍艦教授所へ回航(艦長伊沢謹吾)
安政五年五月二十一日(1858年6月30日)アメリカのフレガット艦ミシシッピ号中国経由長崎に入港(コレラの伝染経路をなす媒体であった)
安政五年五月(1858年6月)ポンペは病院設計を説明し、建築法・使用法・病院規則他質疑に応ずる旨につき出島より報告した
安政五年六月二十日(1858年7月30日)日米修好通商条約の仮条約の調印
安政五年六月二十三日(1858年8月2日)堀田正睦が老中を罷免される
安政五年六月二十六日(1858年8月5日)長崎奉行所は荒尾石見守と木村図書連署の上「病院御取建之儀ニ付奉伺候書付」を幕府に提出
安政五年七月六日(1858年8月14日)第十三代征夷大将軍徳川家定が病死長期に亘る服喪
安政五年七月八日(1858年8月16日)幕府は蘭方医の学習を公許
安政五年七月十日(1858年8月18日)日蘭修好通商条約を江戸で締結
安政五年七月十三日(1858年8月21日)長崎奉行岡部駿河守はポンペの指示によるコレラ対策即ち治療及び予防法を示した訓令を作成してこれを長崎市中及び代官領内に布告する
安政五年七月十八日(1858年8月26日)英国ビクトリア女王から王室ヨットのエンペラーが寄贈される(改名して蟠龍丸:二本マスト・トップスル・スクーナー型木造内車蒸気艦)
安政五年七月下旬(1858年)コレラの劇症患者は減少
安政五年七月(1858年)語学伝習所(西役所内)を岩原屋敷内にある奉行支配組頭永持亨次郎宅に移し、英語伝習所と改める
安政五年八月朔日(1858年9月7日)伝習所詰医師達の臨時勤務は見合わせとなる(然し治療中の患者は伝習所の投薬を申請してもよい旨達)
安政五年八月四日(1858年9月21日)幕府は長崎奉行所からの「病院御取建之儀」に付いての伺いに備後守より早川庄次郎を経て「伺之通相心得御入用其外共巨細取調可被伺候事」と覚を下附し許可を与える
安政五年九月下旬(1858年)長崎のコレラは殆ど終焉する
安政五年(1858年)後半長崎奉行岡部駿河守長常は病院建設のため長崎ー江戸間を奔走
安政五年十月二十五日(1858年)徳川慶福第十四代征夷大将軍に就任:名を家茂と改める

安政五年十一月（1858年）観光丸が長崎に入港（艦長矢田掘景蔵）乗組員はすぐに咸臨丸で江戸に出航
安政五年（1858年）この年、ポンペ、パリにキュンストレーキ（精巧な紙製の人体解剖模型）を発注
安政六年正月五日（1859年2月7日）勝麟太郎（艦長）朝陽丸で江戸に出航
安政六年正月（1859年）観光丸の汽缶取り外し
安政六年（1859年）に至って江戸より長崎に病院設立の許可が達せられる
安政六年二月（1859年）長崎奉行はオランダ弁務官に海軍伝習中止の内密の予告をなす
安政六年四月（1859年）小曽根築地着工　？
安政六年四月（1859年5月1日）幕府は幕府伝習生全員を江戸に引揚げ
安政六年四月（1859年）観光丸の汽缶据付、教官達は佐賀藩・萩藩・福岡藩他の数名の伝習生の為に出島で講義、ウィッヘルス二等士官は数名の長崎地役人達に特別に航海術と「英語」の授業を行う
安政六年五月（1859年）シナ海警備の蒸気艦バリ号長崎入港、教官隊の下士官と兵はバリ号に便乗してバタビアへ引き上げ、一部残留
安政六年六月二日（1859年）長崎・神奈川・函館を開港
安政六年七月三日（1859年8月1日）この日ポンペは日本王国長崎医学校を開始した、と記す、この頃までに大村町の医学伝習所に学生寮を備え医学校としての体裁が整う
安政六年八月十五日（1859年9月11日）佐賀藩伝習生引揚
安政六年九月（1859年）観光丸の補修が残留員の手で完了
安政六年十月十日（1859年11月26日）第二次長崎海軍伝習教官隊長崎を出港（ポスティロン号に乗船して帰国）、このときまでに幕府海軍が所有する蒸気艦は、観光丸、咸臨丸、朝陽丸、蟠龍丸の四隻
安政七年正月十三日（1860年2月4日）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊が品川沖を出航（司令官木村図書守喜毅、艦長勝麟太郎、咸臨丸に乗船）
安政七年正月十九日（1860年2月10日）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊が浦賀を出港（薪水積込完了）
安政七年正月二十二日（1860年2月13日）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団が品川沖を出航（正使外国御奉行新見豊前守、副使外国御奉行村垣淡路守、御目付小栗豊後守、アメリカ軍艦ポーハタン号に乗船）
安政七年正月二十九日（1860年2月20日）幕府は小川町講武所について大目付御目付「此度小川町江講武所引移、来る廿七日より剣鎗砲三術之外、弓術柔術も相始候ニ付、・・・」と達
安政七年二月二十六日（1860年3月17日）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊がサンフランシスコに入港
安政七年三月三日（1860年3月24日）井伊直弼死去（享年46歳、桜田門外の変）
安政七年三月九日（1860年3月30日）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団がサンフランシスコに到着
安政七年三月十八日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団がサンフランシスコを出港

万延元年閏三月二日（1860年4月23日）奉行所は寺崎助一郎と稿本良之進を病院取建掛に任ず
万延元年閏三月十九日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊がサンフランシスコを出港
万延元年閏三月二十五日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団が首都ワシントンに到着
万延元年四月八日（1860年5月28日）岡部駿河守長常は「病院唱方之儀ニ付申上候書付」を幕府に提出し幕府は早川庄次郎を経てその進達を受けここに養生所の名称が確定
万延元年五月五日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊が浦賀へ帰還
万延元年五月二十四日（1860年6月13日）付長崎代官高木作左衛門が長崎奉行所に「養生所御取建地所差支無御座儀申上候書付」を報告
万延元年六月十三日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団が帰路に就く（アメリカ軍艦ナイアガラ号に乗船）
万延元年九月二十七日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団横浜に到着しただちに品川沖に廻漕
万延元年九月二十八日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団上陸
万延元年九月二十八日（1860年）日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団登城
万延元年十月（1860年）小曽根築地竣工
文久元年三月十九日（1861年4月28日）付長崎代官高木作左衛門が長崎奉行所鎬木貫一に「養生所続医学所御取建地所差支無御座儀申上候書付」を報告
文久元年三月二十五日（1861年5月4日）長崎製鉄所第一期工事竣工（艤装岸壁完成）
文久元年三月二十九日（1861年5月8日）ハルデスが長崎を出港帰国
文久元年七月一日（1861年8月6日）長崎市街の南の佐古の丘に養生所（病院及び医学所）が落成
文久元年八月十六日（1861年9月20日）養生所が開院
文久元年末（1861年）南山手居留地（居留地第二期造成計画：弁天崎から下り松地先埋立）竣工
文久二年六月十八日（1862年）軍艦操練所に集合した日本最初のオランダ海軍留学生（13名）が品川沖の咸臨丸に乗船
文久二年九月十日（1862年11月1日）ポンペはオランダ商船ヤコブ・エン・アンナ号に搭乗し、上海、香港、シンガポール経由で母国に向かう
文久二年九月十一日（1862年11月2日）日本最初のオランダ海軍留学生がオランダ商船カリップス号に搭乗し出航（15名：内、養生所より伊東玄伯と林研海が随員として参加）
文久二年十月六日（1862年）オランダ海軍留学生乗船のオランダ商船カリップス号がガスパル海峡のリアート島で座礁、ようやく蘭国軍艦ギニー号に救助される
文久二年十月十八日（1862年）オランダ海軍留学生がバタビアに到着
文久二年十一月三日（1862年）オランダ海軍留学生は蘭船テルナーテ号でバタビアを出航

1863年1月1日 アメリカ大統領リンカーンが奴隷解放宣言を公布
文久三年四月十六日（1863年6月2日）オランダ海軍留学生はオランダのプロウルス・ハーヘン港に到着
文久三年四月十八日（1863年6月4日）オランダ海軍留学生はオランダのロッテルダムに到着、ポンペは留学生一行を訪問し「自分は今度、カッテンデイーケ海軍大臣から日本留学生掛を命ぜられた」と伝える
文久三年四月二十四日（1863年6月10日）ポンペはオランダ海軍留学生達へオランダ外務大臣より与えられた注意書を届け、注意書に基いて、ライデン大学に残った者は津田真一郎と西周助と水夫頭古川庄八以下六名、ハーグへ移った者は内田恒次郎、榎本釜次郎、沢太郎左右衛門、赤松大三郎、田口俊平、伊東玄伯、林研海で、伊東玄伯と林研海はニュージーフのオランダ海軍鎮守府病院に入る前に、物理学、化学、人身窮理学等に関するポンペの講義を聴く、留学生達は生活上の事までポンペに相談するのが常であった
元治元年三月十日（1864年4月15日）夜軍艦操練所は築地の西本願寺付近の出火で類焼消失
元治元年三月二十一日（1864年4月26日）堀田正睦死去
元治元年三月二十七日（1864年5月）軍艦操練所は同所南隣増地元松平安芸守屋敷内仮稽古所にて稽古開始（同月十日に焼失の為）
元治元年五月二十一日（1864年）幕府は軍艦教授所を軍艦操練所と改称
元治元年八月（1864年）横浜製鉄所起工
元治二年三月九日（1865年）幕府は軍艦操練所を廃止
慶應元年四月上旬（六日から十日までの間、1865年）長崎奉行服部左衛門佐常純は養生所を精得館と改称
慶應元年八月十七日（1865年10月6日）長崎奉行服部左衛門佐常純は「長崎表小嶋郷精得館構内江分理所究理所其外等新規御普請出来栄見分相済候義申上候書付」を幕府に進達
慶應元年八月二十四日（1865年）横浜製鉄所竣工
慶應元年八月（1865年）語学所は新町の長州屋敷跡に移り済美館と改称、語学以外にも歴史、地理、数学、物理、経済を教える
慶應元年九月二十七日（1865年）横須賀製鉄所起工式挙行
慶應元年十月十二日（1865年11月29日）幕府は山下金介を経て分析究理所を受取る
1865年12月18日 アメリカ合衆国憲法修正第13条制定［奴隷制の禁止］
慶應二年六月（1866年）軍艦操練所を海軍所と改称
慶應二年七月二十日（1866年8月29日）第十四代征夷大将軍徳川家茂死去（享年21歳）
慶應二年十一月（1866年）小川町の講武所を陸軍所と改称
慶應二年十二月五日（1866年）徳川慶喜第十五代征夷大将軍に就任
慶應三年正月十三日（1867年）陸軍の三兵伝習の仏蘭西教師団シャノワン参謀大尉総督以下が飛脚船ペリューズ号で横浜に到着
慶應三年正月十四日（1867年）陸軍の三兵伝習の仏蘭西教師団シャノワン参謀大尉総督以下が太田陣屋の宿舎に入る、早速、歩騎砲三兵伝習を開始
慶應三年正月十七日（1867年）老中松平周防守は大目付御目付へ「浜御殿地江海軍所御取建之筈ニ候得とも、御普請出来迄、同所仮稽古所於て、明後十九日より海軍術稽

古有之候・・・」と達
慶應三年六月十日（1867年）陸軍の三兵伝習兵の内の騎兵を江戸表屯所へ引移
慶應三年六月十一日（1867年）陸軍の三兵伝習兵の内の砲兵を江戸表屯所へ引移
慶應三年六月（1867年）陸軍所ニおゐて三兵士官学校御取立・・・と決定（陸軍所を三兵士官学校とする）
慶應三年九月二十一日（1867年）陸軍の三兵伝習兵の内の歩兵を江戸表屯所へ引移
慶應三年九月二十七日（1867年）英国士官による海軍伝習の教師教頭トレシーと教師士官ウィルソンが横浜に到着
慶應三年九月二十八日（1867年）軍艦頭並伴鉄太郎が英国士官による海軍伝習の教師達に会う
慶應三年十月一日（1867年）軍艦奉行勝安房守と海軍奉行並土岐肥前守が英国士官による海軍伝習の教頭トレシーと士官ウィルソンに合う
慶應三年十月六日（1867年）英国士官による海軍伝習の教頭トレシー、士官ウィルソン、下等士官二名が伝習所（旧海軍所）の寄宿舎に入る
慶應三年十月十四日（1867年11月9日）徳川慶喜大政奉還
慶應三年十月十五日（1867年11月10日）徳川慶喜の大政奉還を勅許
慶應三年十月十六日（1867年）英国士官による海軍伝習の教師士官二名、下士官二名、水卒四名が横浜から来て教頭トレーシーの配下に入る
慶應三年十月二十四日（1867年11月19日）徳川慶喜将軍職辞職を朝廷に申出
慶應三年十一月一日（1867年11月19日）幕府は大目付御目付に十五歳から三十五歳までの者に「・・・三兵士官之学科伝習可被仰付候間・・・」と達（幕府は強制伝習に踏み切る）
慶應三年十二月七日（1868年1月1日）英国士官による海軍伝習の伝習生71名が築地の伝習所（元海軍所）へ入寮
慶應三年十二月九日（1868年1月3日）王政復古の大号令：徳川慶喜の将軍職辞職を勅許
慶應三年十二月十三日（1868年1月7日）英国士官による海軍伝習において伝習所に旗竿をたて英国教師による海軍伝習を開始
慶應三年十二月二十四日（1868年1月18日）英国士官による海軍伝習は納会
慶應四年一月三日（1868年1月27日）鳥羽伏見の戦が勃発
慶應四年正月五日（1868年1月29日）英国士官による海軍伝習を再開
慶應四年一月十六日（1868年2月9日）長崎奉行所西役所を会議所と改称
慶應四年正月二十三日（1868年2月16日）幕府は、勝安房守を陸軍総裁とし、矢田堀景蔵を海軍総裁とする
慶應四年一月二十八日（1868年2月21日）新政府は沢主水正宣嘉を九州鎮撫使兼外国事務総督に任命
慶應四年二月一日（1868年2月23日）長崎裁判所を外浦町に設置
慶應四年二月（1868年）精得館は新政府により長崎裁判所の管轄下となる
慶應四年二月十二日（1868年3月5日）英国公使パークスより国内戦争中でいづれにも教導はできなくなったので英国士官による海軍伝習の英国教師はひとまず横浜へ引き上げるべき旨申し越す
慶應四年二月十五日（1868年3月8日）九州鎮撫使兼外国事務総督沢主水正宣嘉が長崎に到着

慶應四年二月十七日（1868年3月10日）長崎会議所を長崎裁判所と改称
慶應四年二月（1868年）陸軍総裁勝安房守が仏蘭西教頭シャノワンと会い解約帰国を乞い快諾を得る、この後まもなく仏国教師は仏国公使ロセス（ロッシュ）の勧めに従い一同横浜に引揚げ、仏蘭西教師による陸軍三兵の伝習は終了する
慶應四年二月（1868年）陸軍総裁勝安房守は英国公使パークスに談じ、海軍教頭トレーシーに面語して「終ニ解約シテ帰途ニ就シム」
慶應四年三月七日（1868年3月30日）新政府は「西洋医術之儀是迄被止置候得共自今其所長ニ於テハ御採用可有之被仰出候事」と布告
慶應四年閏四月一日（1868年）明治政府は神奈川裁判所長官東久世通禧-鍋島直大に横須賀製鉄所を受け取らせ判事寺島宗則-井関盛艮を主管とする
慶應四年閏四月八日（1868年）長崎新町の済美館を広運館と改め、立山役所跡に移す
慶應四年五月四日（1868年6月23日）長崎裁判所を長崎府と改称
慶應四年七月二十五日（1868年）新政府は外国官准知事東久世中将の名をもって仏国陸軍三兵伝習の仏教師十八人の解任帰国を仏国公使ウートレーへ通達する
慶應四年七月二十五日（1868年）新政府の外国事務局総裁東久世中将は英国士官の海軍伝習の英教師十余人の帰国につき英国公使パークスへ通達する
1868年9月15日英国公使パークスは東久世中将に書簡を以って英国士官による海軍伝習の英教師の帰国を快諾する
慶應四年九月八日（1868年）より明治に改元
明治元年十月十七日（1868年11月30日）精得館を長崎府医学校（及び病院）と改称
明治元年十一月（1868年）陸運三兵伝習の仏蘭西教師達は、幕軍に参加した伝習隊を援助した砲兵大尉ブリューネとその腹心の伍長カズヌーブ・ブーフィエらを除き、帰国する
明治二年六月十五日（1869年7月23日）大学校設立
明治二年六月二十日（1869年7月28日）長崎府を長崎県と改称
明治二年七月九日（1869年）長崎府が長崎県と改称された旨長崎に布達この後に長崎府医学校を長崎県病院医学校と改称
明治三年二月二十八日（1870年3月29日）長崎県病院が大学の所轄となる
明治四年二月八日（1871年）横須賀製鉄所に第一号船渠竣工
明治四年六月十八日（1871年）長崎・上海間の海底電信線敷設工事竣工
明治四年六月二十六日（1871年）長崎・上海間の海底電信線通信開始
明治四年十月五日（1871年）長崎・ウラジオストック間の海底電信線開通
明治四年十一月十四日（1871年12月25日）長崎県病院が文部省の所轄となる
明治四年十一月二十一日（1871年）長崎・ウラジオストック間の海底電信線通信開始
明治四年十一月二十三日（1871年）広運館が文部省の管轄となる
明治四年十二月（1871年）長崎県病院を長崎医学校と改称
明治五年八月十八日（1872年）付長崎医学校を第六大学区醫学校と改称
明治6年（1873年）4月10日第六大学区醫学校を第五大学区醫学校と改称
明治7年（1874年）4月18日広運学校を長崎外国語学校と改称
明治7年（1874年）5月第五大学区醫学校を長崎医学校と改称
明治7年（1874年）10月12日長崎医学校を廃止
明治7年（1874年）11月7日旧長崎医学校（及び病院）が蕃地事務（支）局病院となる（征台の役の為に公兵員病院とする）

明治7年(1874年)12月27日長崎外国語学校を長崎英語学校と改称
明治8年(1875年)4月31日蕃地事務(支)局病院が長崎県の所轄に帰し長崎病院となる
明治8年(1875年)英医ヒールが寄合町の旧千歳屋より移転して寄宿舎で梅毒病院を開院
明治9年(1876年)6月20日長崎病院医学場開場
明治9年(1876年)8月12日横浜と長崎に司薬場を設置します。
明治10年(1877年)2月15日 薩軍の一番大隊が鹿児島から熊本方面へ先発(西南の役開始)。
明治10年(1877年)2月19日 政府は、鹿児島県逆徒征討の詔を発出(西南の役)。
明治10年(1877年)3月23日 吉田健康は山田陸軍少将の辞令を得て陸軍御用傭に任ぜらる。長崎病院は警視病院の本院に充当。傷病兵の収容所となる。
(第一分派病院:大音寺、第二分派病院:(広運館)、第三分派病院:正覚寺、第四分派病院:バラックを建設)
明治10年(1877年)5月3日博愛社が設立されます。
明治10年(1877年)6月佐野常民が長崎に来て緒方惟準と協議して長崎市中の軍団病院に二分室を設け賊軍傷病者に分与して施療します。
博愛社の病院の最初です。
明治10年(1877年)7月22日 戦時仮病院及び第一乃至第四分派病院の全部が警視病院と改称される。
明治10年(1877年)8月1日 この頃長崎司薬場はエイキマンの監督下に経営。
明治10年(1877年)9月13日 新撰旅団司令官小松宮彰仁親王は、博愛社運動に懇篤な好意を寄せられ、自ら総長に就任。
博愛社からは、社員総代松平乗承も戦地に赴き、戦地派出委員桜井忠興も医員及び看護人等を率いて長崎に出張した。ここにおいて、この一団は軍団軍医部の指揮のもとに長崎の軍団病院第十一副舎を負担し活躍した。それから更に一団は熊本及び鹿児島の各地に赴いた。
明治10年(1877年)9月24日 西郷隆盛が被弾して鹿児島の城山で自刃(51歳)。午前9時頃、銃声が静止(西南の役終結)。
明治10年(1877年)10月16日 長崎軍団病院が廃止され、臨時長崎病院が置かれて(博愛社は)残務処理を行う。
明治10年(1877年)10月31日 博愛社の一団が長崎病院から完全に引き揚げ。
明治10年(1877年)10月英医ヒールが寄宿舎での梅毒病院を閉院し寄合町に移転
明治11年(1878年)1月8日長崎病院医学場を長崎醫学校と改称
明治11年(1878年)5月以降長崎県庶務課乃至学務課に衛生掛を置く
明治14年頃前後に全国各地で駆梅院(梅毒病院)が設置されます。
明治12年(1879年)12月27日長崎県に衛生課を設置
明治12年(1879年)1月20日長崎醫学校を県立とする
明治12年(1879年)5月21日立神船渠が完成して開渠式を挙行
明治12年(1879年)8月旧大徳寺庫裏跡の長崎病院の新築工事が竣工し開院その後敷地内に於ける軍人遺骨取扱の問題が指摘される
明治13年(1880年)12月梅毒病院建築請負が決定
明治14年(1881年)8月長崎醫学校の病院の長崎病院附属梅毒病院への改築工事が

明治14年(1881年)3月長崎鑿学校の病院の長崎病院附属梅毒病院への改築工事が竣工
明治14年(1881年)頃前後に全国各地で駆梅院(梅毒病院)が設置されます。
明治15年(1882年)3月長崎病院附属梅毒病院が長崎病院の附属から離れる
明治15年(1882年)5月27日長崎鑿学校が甲種医学校となる(医学校通則を通達)
明治15年(1882年)7月30日日見峠道路の新道開鑿工事を竣工(国道1等に認定)
明治16年(1883年)第一期長崎港湾改良工事を起工
明治16年(1883年)～明治17年(1884年)頃大徳寺庫裏跡の長崎病院が改めて開院(軍人遺骨取扱の問題の後に)
明治18年中島川変流工事(第一期長崎港湾改良工事の内)を起工
明治20年(1888年)5月19日博愛社は日本赤十字社と改称
明治21年(1888年)4月10日第五高等中学校医学部開校式挙行
明治22年(1889年)4月梅毒病院の新築工事が竣工し長崎梅毒病院と呼称(15日頃を予定)
明治23年(1890年)6月18日薬学科を附設
明治23年(1890年)11月23日 ネーデルラント(連合)王国 ウィレム三世死去、オランダ王位をウィルヘルミナが継承、ルクセンブルク大公をナッソウ=ヴァイルブルク家のアドルフが継承 (オランダとルクセンブルクの同君連合は解消)
明治23年中島川変流工事(第一期長崎港湾改良工事の内)を竣工
明治24年(1891年)9月11日第五高等中学校医学部が長崎県西彼杵郡浦上山里村に移転し在来の医学校を分教場とし四学年生の臨床講義場に充てる
明治26年第一期長崎港湾改良工事を竣工
明治27年(1894年)9月11日第五高等中学校医学部を第五高等学校医学部と改称
明治30年(1897年)12月8日長崎梅毒病院が長崎駆梅院と改称(治療を主とする)
明治31年(1898年)11月27日 九州鉄道大村・長与間開通(長崎・門司間の早岐回り全線開通)
明治32年(1899年)3月25日長崎駆梅院を長崎県立駆梅院と改称
明治34年(1901年)3月31日第五高等学校医学部を長崎医学専門学校と改称
明治34年(1901年)6月28日長崎県立駆梅院を県立長崎娼妓病院と改称
明治35年(1902年)2月1日仁田尋常小学校を設置
明治35年(1902年)4月長崎病院が長崎県西彼杵郡浦上山里村に新築工事竣工して開院
明治36年(1903年)1月 本河内低部貯水池・西山低部浄水場・西山低部配水池完成(第1回水道拡張工事の内:4月下旬から給水開始)
明治36年(1903年)6月 長崎瓦斯会社ガス供給開始(小曽根町にタンクを設置)
明治37年(1904年)3月 西山高部貯水池・浄水場・配水池増設工事完成(第1回水道拡張事業竣工)
明治38年(1905年)九州鉄道浦上・長崎間開通(台場町の仮駅舎を長崎駅、従来の長崎駅を浦上駅と改称)
明治39年(1906年)6月1日佐古尋常高等小学校が開校(第五高等学校医学部分教場跡地及び分教場施設である旧養生所の分析究理所建物と旧長崎医学校の講堂建物の二棟を小学校施設として継承)
大正7年(1918年)4月1日県立長崎娼妓病院を県立小島病院と改称
昭和11年(1936年)当時長崎保険組合小島病院である

昭和11年(1936年)当時長崎体験組合小島病院である
昭和12年(1937年)から昭和16年(1941年)頃にかけて二ヶ所の隣接する民有地を市有地として小学校敷地を拡張整備
昭和16年(1941年)4月1日佐古国民学校となる
昭和22年(1947年)4月1日長崎市立佐古小学校となる
昭和25年(1950年)6月21日職員室として使用していた旧養生所の分析究理所の建物を解体(旧医学校及び病院の建物のうち最後まで残存した旧養生所の分析究理所の建物の解体により佐古の丘の長崎病院を含めた医療系施設の建物の全てが消失しました)
昭和32年(1957年)に旧小島病院敷地に長崎市立佐古小学校の体育館棟が竣工
平成28年(2016年)3月長崎市立佐古小学校と近隣250mの長崎市立仁田小学校を廃止(学童の減少に伴う適正配置化で新設統合校である長崎市立仁田佐古小学校が開校予定)
平成28年(2016年)4月長崎市立仁田佐古小学校が開校(長崎市立佐古小学校と長崎市立仁田小学校とが新設統合し、旧長崎市立仁田小学校の在来敷地施設に開校。旧長崎市立佐古小学校地にて旧全施設解体し、地域住民の生活向上を目的に校地を削減して外周道路を拡張し、新校舎等施設新築竣工の上で、平成31年(2019年)4月より供用開始の予定)
平成28年(2016年)7月旧長崎市立佐古小学校の体育館棟解体に着工。
平成29年(2017年)旧長崎市立佐古小学校の校舎等解体
平成29年(2017年)8月中旬旧長崎市立佐古小学校敷地外周道路拡幅建設工事に着工
平成29年(2017年)9月末長崎医学校正門遺構西側石垣の破壊に着手
平成29年(2017年)10月初旬長崎医学校正門遺構西側石垣を破壊を中止
平成30年(2018年)6月24日 日曜日 現在　長崎市は、長崎市立仁田佐古小学校の当該遺跡地の中核区域(建物敷地及びその外周道路)である旧長崎市立佐古小学校地を建設用地とする、小さな丘の頂部で狭小な土地に江戸期と明治初期に造成された平坦地に立地することより災害時の耐性に難点があり災害時の対応も限定されるとの危険性を本然的に有すると考え得る処より当会が計画段階より斯く指摘する処、土地を大幅に掘削し当初計画になく地盤に弱点があることより追加工事となった数十本の杭基礎工事を伴う、本来旧長崎市立仁田用学校地その他に複数の建設代替用地を有する、代替地との工学的比較検証を行わない、当該小学校校舎等施設新築工事及び地域居住者と長崎市の理事者が事前協議に於いて共に当該小学校建設の条件又は付帯事項として共通認識を形成する当該用地外周道路の小学校用途がなく地域居住者のための代替案の採用の余地がある緊急事象対応と地域の小さな丘の頂部で袋小路を形成するとの地理的地形的な土地の高度差等の条件より当面の直接受益者が極めて限定されて極少数であり、当会が計画段階より斯く指摘する、自動車交通に関係する生活利便の向上を目的とする当該建設用地を削減して行う拡幅建設工事の計画の遂行によって、随時、遺跡即ち遺跡の遺跡としての実態及び遺跡の遺跡としての空間を壊滅しつつあります。

[改訂履歴]
初　版:2017年(平成29年) 5月27日 土曜日
改訂1版:2017年(平成29年)8月27日 日曜日　複数事項追記
改訂2版:2018年(平成30年)1月3日 水曜日　最新事項追記
改訂3版:2018年(平成30年)6月24日 日曜日　ネーデルラント(連合)王国、フランス革命とフランス憲法、アメリカ奴隷解放宣言、アメリカ合衆国憲法修正第13条、末尾に遺跡地の現況、事項追記 (2018年(平成30年)9月7日 金曜日 現在 予定)